

大学生のいじめ体験を考える

——心とからだに刻みこまれた理不尽な体験をどう意味化するか——

法政大学キャリアデザイン学部教授 佐貫 浩

(一) いじめ・いじめられ体験の思想化の授業への試み

(1) いじめ体験の分類

いじめの体験は、今や国民的体験となりつつある。今の大学生にとっては、ほとんどの学生が何らかのいじめ・いじめられ体験を持っていると言ってよい。あとで触れるいじめの4層構造論で指摘されているような傍観者、観衆という位置まで含むと、ほとんどすべてが体験者と言ってよい。この傍観や、観衆体験を持つ者も、以下の手記に見るように、決して軽いものではない。その本質を知れば知るほど、重い悔恨を含んだ体験となる。そしてこのように深いいじめの体験を刻み込んだ若い世代の成長体験、学校体験は、日本人の国民性やその人権意識、民主主義感覚をも大きく歪め、あるいは特徴付けるほどのものになっている。いやそれに止まらず、学びの空間にこのようないじめの構造が組み込まれることによって、学びの性格自体が大きく特徴付けられ、歪められていると言わなければならない。

これから紹介するのは、2014年度秋期に私が担当した「教育原理」の授業で、参加した学生が書いてくれた「いじめ・いじめられ体験記」の内容である。この授業を履修し、手記を寄せてくれたのは38名である。

授業ではいじめ問題は四回扱った。講義としては、①いじめの性格・現状についての講義—1時間、②森田洋司「いじめの4層構造論」—1時間、③土井隆義の『個性を煽られる子どもたち』(岩波ブックレット)とネット

いじめ—1時間を扱い、④学性の手記を素材に議論を行い—1時間、最終的ないじめ・いじめられ体験を提出してもらった。体験記は各自約2000字程度のものである。

その手記の全体的特徴について触れておくと、いじめ・いじめられ体験の状況は、①いじめられた被害体験14名、②いじめ加害体験9名、③傍観者・観衆体験12名、④身の回りで体験10名、⑤体験なし4名、という状況であった(重複あり)。

(2) いじめ体験の思想化を

参加者のほとんどが大学1年生ということもあってか、いじめについての一定の論理をこの講義ではじめて学んだという者が多く、それまで心に刻み込まれた切実な、しかし漠然とした整理のつかない体験を、論理的にとらえ直し意味化していく学習体験であったように思われる。そして自分が味わってきたいじめ・いじめられ体験が、非常に多くの学生の共通体験であることにあらためて気づき、またその体験が持っている深刻さ、意味の大きさ、日本社会の性格に深く関わる本質的なものであることを、一定の驚きをも含んで学んでくれたように思う。

そのことを踏まえて言えば、私は、今、この学生のいじめ・いじめられ体験を、どうやって本格的な人間理解や教育理解、日本社会の構造理解に結びつけるかが、まさに国民の思想形成にとっての不可欠な課題になっているように思う。

第一に、日本社会における他者関係の作り方が、子ども時代から大学生に至るまでの間

に、これほどにも重い課題となり、そこで失敗しないための戦略が高度の緊張感と戦略的思考に基づいて、必死に行使されている様相を伺うことが出来る。そしてその戦略的なサバイバルのためのたたかいは、子どもの人格のありよう、民主主義や平等観、人間の尊厳などという憲法的価値の継承に大きな歪みを創り出していることが見えてくる。他者の人権を侵し、尊厳を貶める戦略をうまく行使することによって自分の安全と居場所を確保する戦略が、生き残るために不可欠になるという空間が、子どもたちの成長の場の基本性格となってきたという、恐ろしい状況が見えてくる。

第二に、しかし、多くの学生が、そのことを、いじめの本質を学ぶ中で、批判的に、悔恨を含んで、とらえるという状況があることである。そしてその悔恨や理不尽への批判の意識は、確かに今になって明確に呼び出された面もあるが、多くの学生が、そのことを当時の現実の中で、子どもの感覚において、矛盾や理不尽として感じてみいることを記している。しかしその理不尽、無惨、非人間性を意識化する指導、理論的学習——あえて理論的と呼ぶべきだと感じている——が決定的に、しかもいじめが起っているその真中において、不足しているということを感じる。それは、当時の子どもという段階においても、もし、そこで感じている理不尽や矛盾の感覚が、意識化され、意味が解明されていったならば、子どもたち自身の学習と勇気によって、もっと主体的にその困難が解決されていったのではないかとも思うのである。そしてそこからは、単なるいじめの取り締まりではない、子どもの意識のつくりかえによる新しい友だち関係、関係性の創造を通したいじめ克服の方向がはっきりと見えてくるように思うのである。

第三に、なぜそのような事態が生まれたのかについてのひとつの大きな理由は、実はその場にともに生きている教師が、そのいじめ

やいじめられの意味、深刻さ、事態の本質的な意味について、自覚していないことが大きな原因ではないかと思うのである。確かにいじめを起こしてはいけない、自殺に至るような事態を何とか止めなければならない、というような自分の教育の失敗を犯さないというための課題としていじめ問題を意識しているという点では、今日の教師は非常に自覚的になってきているといつてよいだろう。しかし、ここに掲げたような事態が、子どもたちの間に深く浸透し、それがいわば国民的体験として、ゆがんだ人格形成やゆがんだ人間観、生き抜くためのやむを得ざる戦略を身につけていることの深刻な意味について、どれだけ自覚的に把握し得ているのだろうか。あえて、そのことをここでは強調したいと思うのである。そして、だからこそ、今、学生の中にあるいわば第一次のいじめ・いじめられ体験を、第二次のいじめいじめられ体験、ある意味でいじめ・いじめられ体験を本格的な思想へと高め、意識化し、教師の根底的な指導力、人間観へと発展させていくことが不可欠ではないかと思うのである。

そのような思いを込めて、学生がいじめ・いじめられ体験を紹介していこう。生の声を読んでいただくことにひとつの意味があると思うので、少し長くなるがお許し願いたい。

(二) いじめ・いじめられ体験手記

学生が書きたいじめ・いじめられ体験の中のいくつかを、いくつかの柱を立てて部分的に紹介しつつ、学生たちがどのように自己の体験を意味づけていったか、またいじめの本質をどう把握していったかについて紹介してみよう。

(1) 残酷な日常——このような場で日本の多くの子どもが成長している

まず、とにかく多様な体験が記録されてい

る。そしてそれは、要するに、学生たちが成長してきたごくありふれた日常として、いじめを体験し、見聞し、一定の心を動かされ、あるいはごく普通の風景としてやり過ごしてきたものだったということが言える。しかしなんと残酷な風景ではないか。そしてそれが学校の日常となっている事態をどう考えれば良いのだろうか。残酷さから言えばもっとすごいものもあるだろう。しかしこのような状況が平均的水準となっていることの方が、ある意味で恐ろしい。

◇私が小学校3年生のとき、クラスでいろいろな子の物が無くなるという事件が起きた。色鉛筆や三角定規、体操着などが無くなり、毎日のように帰りのホームルームの時間にみんなで教室中を探していた。それらは本棚やストーブの後ろに隠されていたり、ゴミ箱に捨てられていたりした。幸いなことに、私の物はなにも無くなることはなかったが、当時の私は逆に自分のものが無くならないことを不安に思っていた。なぜならば、物が無くなってしまった子は被害者になり、無くなっていない子は必然的に犯人として疑われると思ったからである。今思うとなぜそんな事を思っていたのかと恥ずかしく思う。しかし、当時は自分がいじめられていないことへの安心と、犯人だと疑われて次は私がいじめられてしまうのではないかという不安でいっぱいだった。また、4年生のときには、更にいじめが発展していた。当時私のクラスは、勉強もできてスポーツも得意な男の子がクラスを仕切っていた。その男の子が主犯となって、いじめが行われていた。いじめのターゲットになったのは、家が貧しくて少し見た目が汚らしく、勉強も苦手な女の子だった。いじめっ子たちは、ターゲットとなったその女の子の机の中に虫のおもちゃを入れたり、給食の盛りつけを極端に多くしたり少なくしたり、給食の中に消しゴムのかすを入れたり、その子に対して嫌がらせをしていた。いじめられていた女の子以外のクラスの全員は、いじめっ子の男の子に対して服従的態度で、

周りでおもしろがったり、はやしたてたり、見て見ぬふりをしていた。その女の子へのいじめは続き、とうとうその子は学校に来なくなった。不登校になってしまったのである。その時、初めて私たちは自分達のしたことの大きさに気づいた。(1年S・O)

◇私の記憶では、小学校の低学年の頃から始まったいじめがあった。それは、中学3年の卒業まで続いていたと思う。仮にいじめられていた子をAさんとする。その子は、今思えば、明るくて話しやすい、普通の女の子であったと思う。Aさんは、小学校のころに本当かはわからないが、「鼻をほじり、鼻くそを食べている」と言われており、そこから「空気」と呼ばれていた。汚い存在として、学年の人は扱っていた。私はAさんと同じクラスになったことは、小学5年生の時のみだったため、始まった経緯や詳しいことはわからないが、空気といわれてみんなが寄り付かないのは、小学3年生からは確実であると思う。そうであれば、6年間も続いていたのだ。私は、あまり同じクラスになったこともないのに、この事実を知っている。もはや、クラスだけでのいじめではなく、学年全体でのいじめであった。それは、実に恐ろしいことだ。そんなくならない理由で小中と長い間続いていたのだ。その子とは、そのクラスの子も学年の子も「空気」として扱い、関わらなくなっていった。Aさんは、やはり学年に友達はほとんどいなかった。だが、Aさんはとても面倒見が良く、少し小学校で障害を持っている子や不登校気味な子、下級生と仲が良かった。今思えば、そうせざるを得なかったのではないかとも思う。Aさんは、そんな中でも不登校になったり、助けを求めたりするところは見たことはなく、休まず元気に卒業まで学校に通っていた。当時は何も思っていなかったが、今思えばとても勇気のいることですよと思う。自分がそんな空気のように学年全体からいじめられていたら、学校に通う事を拒否するか、違う中学校に行っていたら。中学卒業後は、小中の子が一人もいない高校へ進学していた。(1年N・K)

◇いったい「いじめ」とはなんなのだろうか？ 私は今まで……「いじめ」など、なんだか遠い世界のことだと思っていた。しかし、私はこの授業を受け、「いじめ」について学んでいくにつれて、私は本当に「いじめ」をしたことはなかったのか？ と思うようになった。……まず真っ先に出てきたのは、中学2、3年生の時である。その頃は大体いつも6〜7人くらいのグループでいつも一緒にいた。そのグループの中に1人少し太っている、いじめられキャラの子がいて、何かあるたびにいつもいじられていた。そいつは部活でもいじられていたもので、みんな当たり前のようにいじめていた。いつもしていた「いじり」というのは、基本的に言葉だったりだったが、何人かは殴ったりなどの暴力行為も行っていた。そいつは殴られても怒らないので、例えばそいつが面白いことを言ったりしたら殴っていた。結構強く殴られていたので、肩のところにあざができていたのを覚えている。そのような事が日常的に行われていたが、私たちは別にいじているという感覚はなかった。なぜなら「いじめ」と違って、みんなそいつが好きだったから、よく一緒に遊んでいた仲間はずれとかそういうことはしなかったからである。だから、私たちは「いじり」をやっているのだと思っていたのだろう。(1年S・Y)

◇初めていじめというものを目撃したのは小学校の高学年になった頃だ。パキスタン人の男の子(A君)が入ってきた。その男の子は親の都合で日本に来たようで、もちろん日本語もろくには話すことができない。ある日の掃除の時間にAにクラスの男子が話しかけているのを目にした。その男子(仮にBとする)が日本語を教えていたようだ。しかし、BはAに間違った日本語を教えていた。例をだすと「肩」のことを指さしてこれは「足」というものだよと教えていたりした。私はその時ただのいたずらかと考えて一緒に笑っていた。しかし、ここからかどうかは不明だがその日からAに対する嫌がらせは増えていった。クラスの男子数人で押し合っ

てその菌(実際には見えないもの)を仲間同士で付け合ったりしていた。自分はまたバカなことをやっているなあとその菌の付け合いを愚かだなど考えながらも一緒に笑っていた。だがある日突然Aは学校に来なくなってしまった。私はその理由が一瞬で分かった。そのあといじめを行ったBを含めクラスの数人が担任に呼ばれた。結局私が学校を卒業するまでの間にAが学校に再び現れることはなかった。(1年M・Y)

(2) いじめられることの苦悩

いじめの被害者となったものは、一体どういう精神状況でその時を生き、やり過ごしてきたのか。これらを書いた学生は程度の差はあれ、そこからのサバイバーである。その時どういう精神状況を体験したのだろうか。深刻ないじめによるトラウマ(心的外傷)を抱えさせられたものは、人格のありよう、そして世界と他者に対して取り結ぶその方法に、いじめの影響が刻印されているように思われる。それは人間不信であったり、他者への過度の警戒心であったり、自己の表現への抑制であったり、内面世界を開いて他者と関わることへのシュリンクであったり、多様な現れをしているように思われる。時には押さえたい攻撃性を生み出すことすらある。

もちろんすべてがマイナスの体験としてのみ刻み込まれているわけではない。その苦しい体験を乗り越えることでより深く他者を理解し、他者の心の傷への共感力へと組み替えられていることもあるだろう。しかし背負わされた傷を自分のアイデンティティに統合するという事は、そう簡単なことではない。

手記を読みつつひとつ気づいたことは、積極的な性格を持ってリーダーシップに挑戦しようとしていた多くの勇気ある子どもたち——部活のリーダーたちや学級委員など——を引きずり降ろし、孤立させ、正義の勇気あるイニシアティブを押しつぶしていく作用——しらみつぶしにその勇気あるイニシアティブを

とらえ摘み取っていく作用——をいじめ空間が果たしているのではないかということである。人間としての成長への挑戦を断念させる空間が学校の日常だとすると、それは大きな社会的損失と言ってよい。

◇B君のいじめは理由もわからず突然に始まった。B君は冷笑しながら私を殴り始め、バイキンのような扱いもした。私はなぜこのような扱いを受けなければならなかったのか、どうしてもわからなかった。常に冷たく笑い、人を蔑んだ目をしながら。私は、それをすごく恐ろしいことだと考えていた。怖いことをされるのが嫌で、親や先生に相談することもできなかった。相手からの、自分を軽蔑する態度に、私は自分の存在が否定された気がして、長い間相当のコンプレックスに悩まされた。このいじめは今では笑って話せることであるが、私の人格形成に大きな影響を与えたと思う。それからの私は、周りを気にしすぎてしまい何もできない人間になってしまった。さらに、目立つことを嫌うようになってしまった。中学を卒業するあたりまで、その呪縛から逃れられず、非常に辛い思いをしたのを覚えている。また、暴力などではなくとも、仲間はずれや、陰口、変な噂などで小学校の時に辛い思いをしている人が身近にいた。私と彼は、もちろんお互い自殺することも考えたし、相手を殺したいと考えたこともあった。それらを通して、思ったことは、やはり「いじめの問題」というものは、いじめを受けたことがある人でなければその本質はわからないと思う。いじめを受けた人は、心に深い傷を負う。その傷で性格が本当に変わってしまうのである。幸い私は悪循環から脱出できたものの、心に深い傷を負ったままの人間は、とにかく人の目を気にし、被害妄想にとりつかれ、普通の人と普通の人付き合いをすることすら辛くなるのである。私ももちろん、誰かに裏切られたりしたらどうしようなどと考えてしまい、頭がおかしくなりそうになったこともあった。(4年 K・O)

◇高校二年生になる時のクラス替え。学年でも有名な奇抜な二人組と、私は同じクラスになってしまった。一年生の頃はその奇抜な二人は別々のクラスだったのだが、二人揃ったことでクラスとしてまとめることが難しくなることはみんなが予想していた。その二人組は「この学校の生徒は地味でセンスがなく、同じ高校だと思われるのが恥ずかしい」と考えていたようで、学校にいる自分たち以外の人全員のことを見下し、馬鹿にしていた。そんな中、クラスの中心にいて部長や委員長をしていた私は、調子に乗っている・いきがっていると思われたのだろう。目をつけられてしまった。そしてもう一人のクラスの男の子も。彼はクラスの中心という訳ではないがうるさく、そういった面で私と同様に調子に乗っていると思われたことが原因だろう。しんどい日々が始まった。内容は至ってシンプル。直接何か害を加えられるのではなく、仲間を増やすのでもなく、ただ大きい声で私や彼の特徴を挙げ、(名前は言わないが、絶対的に私や彼の事だと断定できる)悪口を言う。また、こっちを向いて指をさしながら普通の声で悪口を言われる時もしばしばあった。例えば、学校に新しい鞆を持っていけば、教室のドアを入った瞬間に、「え、鞆見た？ ダサすぎない？ あんなのどこに売ってんの？」と教室中に聞こえる声で言われる。髪を切れば、「絶対 1000 円カットじゃん！ 1000 円カットって高校生で行くやついるんだ」と言われ、何も無い日でも「今日も一段とダサイよね、どこがいつもよりダサイか探そう」「筆箱？ いや筆箱はいつも通りきもい。靴下？ いや靴下もいつも通りダサイよ！」と言われる。休み時間だけにとどまらず、授業中にも容赦はない。初めは、クラスみんなに私が言われていることを気づかれないように、二人の声が聞こえないよう話しかけたり、できるだけ新しいものは持っていかないようにしていた。しかし、すぐにみんなに気付かれてしまった。隠すのは困難なくらいに毎日大きい声で私の特徴をダサイと言いながら列挙するのだ。みんな気付かないわけがなかった。……やめてと声をあげれば何がとシラを切られるのは目に見え

ていたし、どうしたらいいかわからない。今日は何を言われるのかと、学校に行くのが苦痛で、教室に居づらい。友達に気を遣わせているのが申し訳ない。そんなことばかり頭の中をぐるぐるして、一人でたくさん泣いていた。(1年H・M)

◇(いじめからA子を庇ったことで)A子へのいじめは終わった。ターゲットが私になった。庇った私が気に入らなかつたらしい。部活内だけでなく、普段の学校生活の域にまでいじめが達した。いつも一緒にいて信頼をおいていた他の部活の友だちまでも私から離れていった。きっと耳打ちしたのだらうと思った。誰の仕業とか考えるまでもなかった。しかし、私はイジメなどどうでもよかった。自分が間違っただけをしたとは思わないし、庇ったことに関して後悔はしなかった。とはいえ、信頼していた友だちを失ってしまったのは私の中で最大のショックだった。メールをしても返事はこず、学校では無視をつらぬく。とても寂しくて、帰り道で毎日泣いた。親には変な心配されたくなくて、帰り道で泣いて、家に着くまでに泣き終えて、何事もなかったかのように帰宅するのが日課だった。……あの半年間、今思えばあつという間だった。自分は何を考えていたのだらうと今は思う。自分以外のもの、人、すべてにおいて関心がなかった。正確に言えば、関心をむける余裕が私にはなかったのだと思う。私の感情は、“無”か“悲”かしかなくて、それ以外のことにはある意味では動じなかった。三年生になって、新しい環境になったとき、自分のまわりには友だちがいた。友だちと笑っている自分に気づいたとき、私は感情の感覚を失っていたことに初めて気がついた。(1年Y・S)

◇理性の範囲で「いじめでない」といい誤魔化していても、本能の範囲では相当に心穏やかではなかった。何度も復讐(盗られるシャーペンのノック部分に針状の細工をする程度の些細で卑小なもの)をしようと思ったし、犯罪推理物のトリックに執心していた。今思えば、かなり危険であった

と思う。しかし、ある時クラスでいじめっ子たちが間接的に関わってしまったような形で事故が起きることとなる。その事故の影響で、いじめっ子たちは大分丸くなり、また事故の衝撃により自分自身の怒りも鎮静化された。これが、一つの転機といえる。(1年N・H)

(3) いじめの入れ替わり

現代のいじめの特徴のひとつに、いじめが次々とターゲットを変えて、まるで生け贄を求めるとして、異質者、同調しない異端者を嗅ぎ出して行くことがある。だから子どもたちは、異端者であると指さされないために、強迫的に同調を強いられていく。そしてその同調強制力に拗って、いじめは次第に権力性を強め、専制的な力を獲得していく。いじめの権力は関係性の力学として成立し、その関係性が次々と伝染していくことによって、瞬く間に教室全体、子どもたちの全体を巻き込み、この権力に服従させようとする。

ともすると、いじめはいじめをしてはいけないという「規範」の不足から起こることであるとして、規範強化によって対処すれば解決できると主張されることが多いが、いじめは、この関係性に組み込まれた権力によって恫喝された子どもたちが、次々にいじめの力学にとらえられていくことで生まれ、広がる。いじめ対策は、この力学そのものどう対決するかをこそ、考えなければならない。しかも子どもとともにそのことを考えなければならない。

◇いじめの立場の入れ替わりは現代いじめを複雑にしているもっとも大きな原因の一つである。ある部活では、一年間のうちにいじめのターゲットが次々と変わり一年後には誰もがターゲットにされた経験を持っていた。いじめられっ子はいつまでもいじめられっ子ではない。そのターゲットにされた時の恐怖からか、自分が標的とされなくなったあとも部員たちは積極的にいじめる側にかか

わり、自分を守るために必死のようだった。また、その部活に友達がいいた私ですら今誰がターゲットなのかわからないことがあったのに、教師、親の立場からしたらなおさらだろう。表面上、真面目な生徒がいじめっ子であったり、つい昨日までいじめの中心的立場だった子がいじめられっ子になったりというようなことはよくあることだった。(1年S・K)

◇女の子の中では仲の良い子たちでグループができ、「強いグループ」「弱いグループ」のようなものが作られていった。「強いグループ」には女の子たちにとってボスのような存在の子とその子と仲の良い子たちが属している。いわゆる「いじめっ子」たちのグループだ。その「強いグループ」の子たちは毎日のように誰かターゲットを決めていじめるということを続けていた。いじめの対象になる子は特に何か理由があるわけではなく、いじめ側の子たちがなんとなくターゲットを決めて、ただただ理由もなくいじめることが多かった。したがって、私も自分がそのターゲットにならないように「強いグループ」の子たちにはすごく気を使っていた。しかし私もいじめの対象になった。ある日、私は突然みんなから無視されるようになった。何をしても省かれて、私の存在などないかのようにみんな私を相手にしてくれなかった。また、私の聞こえる距離でわざと悪口を言ったり、舌打ちされたり、様々だった。もちろん私と元々仲が良かった友達は私の側についてくれたが、それ以上に周りからの仕打ちがひどかった。よくよく考えてみると、私がターゲットにされた理由は私がいじめられる前にいじめられていた子と話をしていたことがきっかけだったようだ。いじめられていた時は周りの目や反応がとても怖くて精神的に追い込まれていた。その当時は本当に学校に行くのが嫌で毎日の生活が苦痛でしかなかった。しかしいつの間にか私はターゲットから外され、また違う子がいじめのターゲットになっていた。私はその時は自分がいじめられなくなったことに安心して良かったと思っていたが、他の子がいじ

められているのを見ると何とも言えない感情が込み上げてきた。しかし、そのいじめを止めることなど出来ず、見て見ぬふりをしていた。(1年S・I)

(4) いじめの力学による学びと人格形成空間の歪み

いじめは単に被害者を犠牲にするだけでなく、子どもたちが生きる空間の性格を組み替える。その結果、学びと共同の空間としての教室の性格が組み替えられる。

第一に、学びの性格が変わる。そもそも、日本の学校の教室空間は、一方的な「正解」伝達空間という特徴を持ち、そのことが暗記主義的な学びを生み出し、自分の意見を出して議論するという性格が奪われているが、いじめの圧力は、さらに強力な同調圧力を及ぼし、表現の自由を奪い、「発言」を封殺する。それらの複合的な作用——受験学力といじめによる表現の自由の剥奪との相乗的な作用——の結果、普通の中学、さらには高校では、生徒が自分の意見を出し、討論するという性格がほとんど奪われている。授業に参加するということは、自分の意見や疑問をその場に出し、その場に自分の頭脳を参加させ、一緒に考えることである。その表現が抑圧されるとき、学習に必要な自由な思考が困難となる。

第二に、「異質性」への抑圧である(異なることを個性と呼び習わす習慣があるが、個性概念と異質性とは異なっている)。異質な面——能力、性格、考え、容姿、積極性、等々——を徹底的に抑圧しその表出、表現を押さえる作用を果たす。しかしその異質性とは、より本質的に言えば、最も自主的な自分自身からにじみ出てくる真性の自己そのものに他ならない。だからそれは本当の個性の抑圧でもある。自分らしさを自ら抑圧し、押し隠さなければ生きていけない空間で、子どもたちが成長しなければならないということは、なんと

いうことだろう。

第三に、やがていじめの力学、いじめの権

力が教師の指導力を上回るとき、学級は一挙に崩壊へと向かう。いじめは、人権や平等や人間の尊厳の対極にあるが、その論理が学級の支配秩序として公然化する。

◇「小学校低、中学年では授業には積極的に手をあげる風潮があったが、高学年になると……「手を挙げることは恥ずかしい」と考えるようになり、中学生になるとその考えはエスカレートし「授業中に手を挙げないことは当たり前、挙げている人は皆から疎まれる」というような考えが当然のように受け入れられていた。私自身も、勉強は割と好きなほうであり先生に褒められたいと意識するような子供であったため、小学校三年生ぐらいまでは積極的に手を挙げ発言し、間違っても周りも自分も笑い飛ばして授業は続行される、というような授業風景であった。しかし、四年生あたりになってから発言をして間違えると後ろのほうでくすくすと笑う声が気になるようになり、また目立つ友達などから「授業中に必死に発言して真面目だね、ださい」と言われてしまったことによって、授業中に手を挙げ発言することは格好悪いことで真面目ぶった行為なのだと認識し、高学年になるにつれ次第に授業中に手を挙げる生徒は一部の活発で人気のある男子を除き、私を含め段々といなくなってしまったのだった。」(2年 N・N)

◇「(表現の自由を行使しなくなっていく理由は)一つ目は、授業中に挙手や発言をしなくなったこと。先生が答えや発言を求めても、声をあげることはなくなった。教室の雰囲気は「目立ってはいけない」「イコではいけない」と言っているようで、息苦しかった。音楽の授業では全く歌わず、発言もしない。単なる「座学」になってしまっていた。二つ目は、小学校高学年の時にクラス内でいじめに遭ったこと。教室に行けなくなるくらい辛い思いをし、それ以来教室ではかなり気を張るようになった。「友達地獄」のような経験もした。トイレに行くとき、職員室に行くとき、教室移動をするときには、必ず友達と一緒に。大して気が合

うわけでもない子と毎日行動を共にすることはラクではなかった。高校生になってからは気が合う友達、上辺だけではない付き合いができる友達が増え、学校が再び楽しくなったが、学校という場所には必ずある「スクールカースト(上下関係)」や「グループ化」にはずっと違和感を抱いていた。三つ目は、暗記中心の学習である。定期試験ではほぼ暗記力が求められるようになり、短期的な暗記力ばかりが身についた。中高大一貫校だったため高校受験と大学受験がないのにも関わらず、プロセスよりも結果が評価されるシステムに嫌気がさした。」(1年 Y・T)

◇人と外れたことをしないように、なるべく目立たないようにすることで、いじめられることをまぬがれてきた。又この様な行動は、授業中においても同様であるから、1人の発言に同調したり、積極的行動をとらず、考えるという授業の受け方をしてこなかったことの一つの要因であるように思う。いじめられないようにするが故に、自己を隠し個性がなくなり皆が同じような考えを持つようになってしまう負のスパイラルに陥ってしまっていることに気づいた今、恐ろしく思う。(1年 K・O)

◇では、そもそもいじめの原因とはなんなのだろうか。それは多くの場合、少し違う意見を言ったり、流行のものを持っていなかったりと、とても些細なことである。いじめっ子は周りを味方につけるためにみんなとの違いが分かりやすい人を対象にする。みんなと違うターゲットが悪いのだといじめを正当化するためである。このような現状の中で、現代の子供たちは特に、違いをもつことを恐れるあまり安全地帯の多数派に流れ、個性を出せなくなっている。そのことがまた、生徒の中からいじめを止める存在をもなくしている。……学校では今までのように「いじめは悪いことです」と誰もがわかっていることを表面的に伝えるだけではない。これからの教育は、生徒たちのいじめに対する問題意識を意識化し、個性を認め自己表現を促進するようなものであるべきだ。(1年 S・K)

◇中学に入るといじめは更にひどくなっていた。私の通っていた中学では生徒同士だけでなく、先生に対するいじめもあった。乱暴な生徒は最初のうちは、先生に注意されると「うざったい」というような態度をとっていた。だんだんとエスカレートして、先生に対して暴言を吐くようになった。周りの生徒たちもそれを聞いて先生を小馬鹿にするような態度を取るようになり、学級崩壊のような状態が続いた。配られた紙を丸めて床に捨てたり、音楽をスピーカーで大音量で流したり、ペラペラでたばこを吸う生徒がいたり、すごい状態だったのを覚えている。先生も生徒をまとめられなくなって、まともに授業を受けてる生徒はほとんどいなかった。中学一年生の時は、そのようなフワフワした気持ちの中で過ごし、周りに流されて私も全然勉強ができなかった。うつ病になって学校を去ってしまう先生もいたから、いじめとは本当に恐ろしいと思う。最近では、すぐに「きもい」「うざい」「死ぬ」という言葉を発する生徒がたくさんいる。言った本人は本気で思っていない「ふざけ」であったとしても、言われた方はずっと心に残っていて、本当に自殺してしまうニュースも良く聞く。いじめが原因で自殺する人の気持ちを考えると、とても苦しくなる。(1年 K・S)

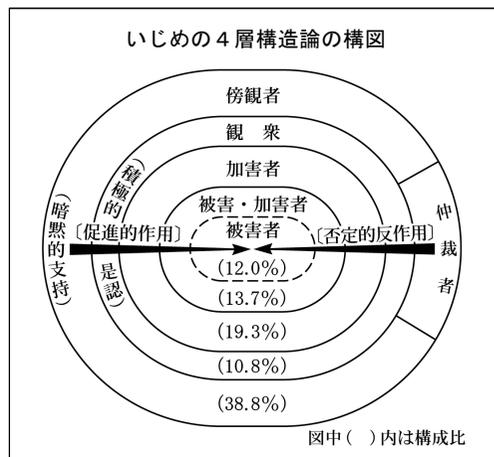
(5) いじめへの負担・傍観・観衆

——いじめの4層構造論の学習によって拓かれる新しい視野

この授業では、いじめの4層構造論を、その提唱者である森田洋司氏の論文をテキストにして学んだ。そしてその学習に支えられて、多くの学生が、自分がいじめ・いじめられ体験の最中にあるときに、まさにその四層構造にとらえられていたことに気づいていったように感じた。

いじめの4層構造論とは、以下のような構図で示されるいじめ空間の性格を把握した理論である。ここではその内容の解説はしない。

ここで注目しておきたいことは、この理論を学ぶことで、すでに傍観者や観衆という位



森田洋司、清水賢二『いじめ—教室の病い』
(新訂版) 金子書房、1994年、51頁

置にいることで、自分はいじめに関与し、いじめを支えている役割を果たしていたのだという気づきが得られることである。そしてその気づきとともに、当時感じていた何らかの違和感や困惑や恐れがはっきりと理解できるようになるということである。そしてもしその時にこの4層構造論という意識化が出来ていたならば、もう少し違ったスタンスを取り得たかもしれないとも感じているのではないかとということである。

そのことから私が指摘したいことは、今こそ、このいじめの構造論を、子ども世界をしっかりと生き抜く教養として、人間の尊厳を自分たちで守り実現する子どもとして成長するための不可欠の知識として、子どもに教え、伝えるべきではないかということである。それは高邁な知識としてではなく、自分たちの苦悩や戸惑いや違和感を解明し、勇気と呼び起こす意識化の力として、子どもたちに染み入るように理解されうるのではないかと思うのである。

◇中学校時代の女子バスケット部では、部員間でのいじめがとても激しかった。……部員内で1番バスケットが上手で、運動神経が良く、見た目も可愛い子

が私たち同学年を仕切っていた。そして徐々に、そのリーダー的存在の子を中心に……何かと理由をつけて目につく子を見つけ、みんなでその子を無視して仲間外れにするといういじめが起き始めた。目につく子というのは、部活をさぼる、走るのが遅い、発言が周りの空気を読めていない、見た目が可愛くないなどで、ターゲットはどんどん入れ替わっていった。おそらくいじめっ子だったリーダー的存在の子以外ほぼ全員の（バスケットボールの）経験者グループの子が被害者を経験しつつ、加害者も経験している。私たち初心者グループは、経験者グループの子があからさまに本人に聞こえるように大きな声で目につく子の悪口を言っている時、何も反論することが出来ず、その悪口を聞いて一緒に笑っているだけだった。経験者グループで仲間外れにされた子は決まってみんな、私たち初心者グループに交じっていた。私たちはその子と仲良くしていたら目をつけられてしまうのではないかとびくびくしながらも、毎日一緒に行動をしていた。しかし、私たちの不安は的中した。いじめの標的が私たち初心者グループにまで広がってきたのである。バスケが下手くそだから、練習や試合でミスばかりするからなどの理由であった。私は目をつけられないように出来るだけ目立った行動、発言はしないようにした。そしていじめっ子に好かれようと、その子が望んでいる発言や行動を考えてするようになり、いつの間にかその子ととても仲良くなり、いつも一緒にいるようになった。それどころか、私はその子と一緒にあって、目につく子を無視して仲間外れにするようになった。つまり、私はいじめの被害者になることを避け、傍観者から加害者になったのである。今だからいじめは反対だと正面切って言えるが、当時の私にはその考えも言葉も通用しなかったと思う。私は、いじめられるよりはいじめる方がいいと思っていた。(1年S・O)

◇基本的ないじめの構造には加害者、被害者、傍観者、観衆の4つの立場がある。私はよく傍観者の立場にいた。私の中学はとくに大小さまざまな

いじめがあったが、私はいじめに深くかわからないよう、かといって地味だとは思われないような立ち位置が私にとって都合がいいかいつも考えて動いていた記憶がある。今考えれば馬鹿らしいと思えるが、当時の私、またはおおくの中学生にとっては、学校がすべての世界のように感じるのである。その学校、クラスという集団生活からあぶれることはこの世の終わりのようにも感じていた。いじめはよくないこと、いじめられている子がかわいそうとは思いつつも、もし自分だったら……と姿を重ねつつも、本気でいじめを止めようとしたことはなかった。いじめられている子にも同じように接したり、声をかけたりはしていたが、いじめられている子が私のグループまで入ってこないように予防線を張っていた。私のような立場の傍観者は悪役になることすらひきうけない、もっともずるい立ち位置だったと思う。いじめの加害者や嚇し立てる観衆はもちろんいけない。しかし傍観者の行動も同じようにいじめを正当化しているのである。(1年S・K)

◇また、小学校高学年の時も、いじめを見たことがある。ある一人の子をターゲットにして、その子とすれ違うと息を止めるしぐさをしたり、掃除のときにその子の机を運ぶ時は人差し指だけで持つてなるべく触れないようにしたりしていた。最初にやっていたのは男子のうるさい人たちだけだったが、だんだんとクラス全体でそれをやるようになっていた。そして私もそのうちの一人となっていた。本当は関わりたくないし、このようなことをするのは良くないと分かっていたが、自分がターゲットになるのも嫌だし、悪いことだからやめようと、声に出して言うことはできなかったから、同じように行動してしまった。その時は、結局クラス全体でやっていたから担任の先生にもばれて、主体的にいじめをしていた人だけが怒られたようだった。しかし、私は先生に怒られた記憶がない。怒られていないのだ。確かに無視などはしていないけど、私も一緒になって加わっていたのに、先生は一部の人にしか怒らなかつた。今思

うと、その指導の仕方は間違っていたと言える。クラスの全員がいじめの雰囲気を作っていたし、実際にいじめていたから、クラス全体で話し合うべきである。この前講義で習った「いじめ集団の構造」の図から考えると、この時私は傍観者というずい立場にいたと言える。多数派にいた方が楽し、安全と考えるのはふつうである。しかし、実は傍観者の人数はもっとも多いのだから、傍観者皆がいじめられている側の味方につけば、大きな力となって、助けることができる。すなわち勇気を持って行動することはとても大事であると言える。(1年 K・S)

(6) 教師へ

いじめの本質が見えてくるとき、そして自らもまたその構造にとらえられていたことが反省や悔恨を含んでとらえられていくときに、その経験は、教師の仕事への決意や情熱へとも転化していくことができる。

教師になろうとする学生は、多くの場合——全員と言いたいのだが——、人権や民主主義、人間の尊厳を伝え、子どもの中に実現していきたいと考えているのではないか。しかし今必要なことは、子どもたちが生きる教室空間は、まさに今、この人権や人間の尊厳を巡る激しい攻防戦の最中に——そしてその最前線で敗北しいじめの権力に攻め込まれてきている状況に——あるという現実をしっかりと認識することである。あえて誇張するならば、教師は、その人権を巡る子どもたちのたたかいの場に赴き、そのたたかいを勝利に導く同士として、子どもたちとともに生きる決意を求められているのである。そしてこれほど多くの学生に共有されているいじめ・いじめられ体験の思想化こそが、そういう資質をこれから教師になろうとする学生に獲得させることができるのではないかと考える。

◇将来教員を目指し、学校という「集団社会」に行こうとしている私にとって「いじめ問題」は切

っても切れないものであり、教師が「傍観者」になってしまったら被害者のよりどころは学校から無くなってしまおうと考える。だから学校が、教師が「いじめ」にどれだけ正面から向き合おうとできるか、「いじめ」の発見・解決に努めるかが重要になるだろう。教師に必要なのは勉強を上手に教えること以上に周りを見渡す広い視野と問題に真っ向から立ち向かう「勇気」なのだと「いじめ問題」を介して理解できた。しかし教師や学校だけでなく社会全体、我々個人それぞれの意識が「いじめ」の抑止をしなければ一向に「いじめ」は減らない。私を含め一人でも多くの人が「傍観者」から脱却しなくてはならない。「いじめ」をするのは社会ではなく人だ。だから人が変わらない限り「いじめ問題」の解決はないだろう。(1年 T・M)

◇「いじめ」の加害者の心理はどんなものなのだろうか。そこには「優位に立ちたい」、「いじめなきゃいじめられる」、「なんとなく気に食わない」、「自己の確立」があるだろう。四つ目の「自己の確立」とは「いじめ」をすることで自らの存在を意義付けることだ。いじめることで得られる「優越感」に浸り自らの存在の大きさ、強さを確かめるのだ。四つの理由すべてがいじめる側の自己中心的考えであり、いじめられる側にたとえ落ち度があってもそれは「いじめ」の「要因」になるが「原因」にはならない。こういったことからわかるのは「いじめ」を減らすことができるのは我々「傍観者」なのだ。それは友達なのか親なのか、先生なのか立場はいろいろあるが「いじめ」を制止できるのは「傍観者」であり、それができなければ被害者は追い込まれ続け自殺という惨事が起きる。しかしそれは簡単ではなく、先ほども述べたように「いじめを止めることで自分がいじめのターゲットにされるかもしれない」という想いがある限り困難だ。(1年 T・M)

◇子どもたちの中で、いじめが広がっているということは、自分を表現する表現の自由や創造性、人格の自律性が成長過程で抑圧されているという

ことを意味している。いじめによる不登校や引きこもりなどの悪影響が日本社会に広がっているという事の深刻さを、私たちはしっかり捉える必要がある。そして今、教育はいじめと正面からしっかり向き合う必要がある。私たち大学生は、なんらかのかたちでほとんどの人が、いじめ・いじめられた経験をし、表現の自由を抑圧されてきたという経験を持っている。だからこそ、いじめ問題は、人間が人間として成長していく上で、解決すべき最も深刻な共通問題である。そして、いじめ・いじめられ体験をくぐってきた今日の私たち大学生こそ、その経験を意味化し、現代のいじめの中にある子どもたちの本当の苦しみをしっかり理解し、支える大人として、新たな教育を生みだせるよう努力していかなければならない。そして、私は苦しんでいる子どもたちを救ってあげられる教師になりたい。(1年 S・O)

◇私にとってのいじめは今の自分を形成している大切な要素であると認識している。もちろん、いじめはあるよりない方がいいに決まっているし、簡単に許されることではない。しかし、私はイジメの経験があったからこそ痛みを知っている。人の痛みを知れたことでわたしはひとまわり大きい人間になれたと思っている。しかし、この経験を実際に生かさないことには全く意味がない。あの頃、私は大人を信頼できなかった。だから未来の生徒達が私と同じ思いをしないためにも、私は生徒の気持ちを察することができ、生徒の声に耳をしっかりと傾けられるような教師になりたいと思っている。(1年 Y・S)

おわりに

学生たちとの対話を通して、いじめ・いじめられ体験が、学生自身の人間観や生き方にとっての大きな、そしてある意味でこの社会に対する安心と信頼を打ち砕く否定的なものであることをあらためて感じた。もしそのままの形で、この体験が心の中に滞留し続けて

いくならば、それは人が生きることへの大きな、あるいは漠然とした心の重しのようなものに止まり続けるかもしれない。あるいは無意識の世界に存在し続け、人への信頼が決定的に問われる心の危機の瞬間において、トラウマとして噴出するかもしれない。

とするならば、このいじめ現象を、他者と共にしか生きられない人間という社会的動物が、他者と共に生きる空間(居場所、生活の場)を求めて苦闘する様として解釈し直し、その社会的な共同性の実現に人間的な筋道を与えることが出来なくなっている現代社会そのものが持っている病理現象として、すなわち社会の側にある人間を破壊する作用の結果として、あらためてとらえ直す必要がある。そして自分や周りの人間の中にあるともに生きることへの人間的願いにあらためて共感し、信頼し、それをともに実現していく方法と技を獲得することに、再挑戦していくあらためての勇気をとりもどさなければならない。

そのような意味において、教師を目指す学生にとどまらず、すべての若い世代にとって、いじめ・いじめられ体験の意味化、思想化が、課題となっている。